



森林ふれあい情報

令和 2年 11月
第 55 号

林野庁中部森林管理局
木曾森林ふれあい推進センター
〒397-0001 長野県木曾郡木曾町福島1250-7
TEL:0264(22)2122 FAX:0264(21)3151
E-mail:kiso-fureai@maff.go.jp

当センターでは、新型コロナウイルスの感染予防対策を徹底し、森林・林業体験学習会、ライトセンサス及び自然再生事業等を行いました。

教職員を対象とした森林・林業体験学習会



講師から説明を受ける参加者（福島城址）

説明を行いました。当初は、開催場所を赤沢自然休養林で予定していましたが、7月豪雨災害により赤沢自然休養林へのアクセス道路が通行止めとなったため、急遽、城山史跡の森に変更しました。

城山史跡の森の散策と御料館の案内をお願いした講師は、木曾森林管理署と「多様な活動の森」の協定を締結している「城山史跡の森倶楽部」から派遣していただきました。

参加者は城山史跡の森を散策しながら、長野県の希少野生動植物に指定され、当史跡の森に自生しているササユリ・ヤマシャクヤクの保護活動の説明、史跡の森の生い立ち、植物・樹木の見分け方について説明を受けました。

散策後は御料館に戻り、江戸時代末期に描かれ「林業遺産」に選定されている2巻からなる巻物の「木曾式伐木運材図会」の説明を受けました。この巻物は江戸時代前期から大正時代まで続いた飛騨や木曾谷での木材の伐倒、伐倒箇所から谷までの搬出、谷から川までの搬出及び川から到着地の名古屋までの木材の運搬の流れを描いたものです。

参加した先生からは「楽しく参加する中で、木曾の森林について理解を深めることができた」、「木曾の林業の歴史を子供たちにも伝えたい」、「教師は3～4年で転勤になるので、このような研修を毎年続けてほしい」などの感想が寄せられました。

木曾郡内の教職員を対象とした「森林・林業体験学習会」を8月6日（木）木曾町の御料館（旧帝室林野局木曾支局庁舎）及び城山史跡の森（城山国有林）で実施しました。

この学習会は、小・中学校の教職員に森林・林業について理解を深めてもらい、森林環境教育の重要性やその知識を高めていただき、学校での総合的な学習時間のプログラム作りに役立ててもらうことを目的に、長野県との共催により平成14年度から実施しているもので、今回で18回目の開催となりました。

今年度は木曾郡内の小・中学校教職員7名、関係者5名の計12名の参加があり、森林散策と御料館の案内及び「木曾式伐木運材図会」の



講師から説明を受ける参加者（城山国有林）



木曾式伐木運材図会の説明を受ける参加者



木曾式伐木運材図会に描かれている絵の一部

「木曾式伐木運材図会」の解説が中部森林管理局広報誌「中部の森林」の5月号から掲載されており、中部森林管理局のホームページで見ることができます。

木曾谷支援の取組「御嶽山麓トレッキングパズルラリー」

平成26年9月に発生した御嶽山噴火災害等により、木曾谷の観光産業は大きな打撃を受け、6年が経過する現在でも落ち込んだ観光客数に回復の兆しはあるものの、災害発生前の水準に戻っておらず、新型コロナウイルス感染症対策でさらに深刻な影響を受けています。

こうした中、当センターでは木曾谷の観光ルートである木曾街道にちなみ、「中山道木曾十一宿パズルラリー第2弾」と、「赤沢自然休養林トレッキングパズルラリー」を実施しています。

令和2年8月1日に王滝村の王滝口登山道からの入山規制が緩和され、御嶽山登山道全4ルートからの登山が可能（一部規制区間あり）になったことを受け、復興支援の新たな取り組みとして「御嶽山麓パズルラリー」を8月から実施しました。

御嶽山を訪れる登山客等に、4箇所^の登山口等に設置したパズル箱内の紙パズルピース全4枚を集めて応募用紙に貼り、必要事項を記入してもらい当センターに郵送するか直接持ち込みいただくと木製パズルセットを進呈するものです。

パズルに採用した絵は、上松町内の木曾路美術館の協力を得て、江戸時代の浮世絵師「歌川広重」が描いた「木曾路之山川」を採用しました。



王滝村田ノ原天然公園に設置したパズル箱

御嶽山麓紙パズルピース箱設置箇所

長野県木曾郡王滝村：田の原天然公園

長野県木曾郡木曾町（三岳地区）：御岳ロープウェイ

長野県木曾郡木曾町（開田地区）：やまゆり荘

岐阜県下呂市小坂町：濁河温泉

自然再生事業

中央アルプス駒ヶ岳（標高2,956m）では、登山者による踏み荒らしや局地的豪雨、豪雪等による砂礫の移動等により高山植物の生育地が荒廃し、貴重な高山植物の衰退が懸念されていることから、当センターでは植生の復元を図るため、平成17年度から植生マットの敷設作業を実行しています。

今年度の取り組みとして、平成21年度に復元作業を行った個所の補修を兼ねて、植生マットの敷設及び播種を行いました。

当初計画した9月15日（火）は、快晴で爽やかな秋風が吹く絶好の作業日和でしたが、予期せぬロープウェイの機械トラブルのため、急遽下山することとなってしまいました。参加者及び関係署等の協力を得て、山小屋側の避難小屋まで資材を運搬し仮置きをすることができました。また、関係法令の許認可を得て高山植物の種子採取を行うことができました。



植生マットの運搬

改めて作業を設定した10月1日（木）は、濃霧と晴れ間が繰り返す天候でしたが、長野県及び関係署等の協力を得て、無事敷設作業を終えることができました。作業地を登山する方々から作業内容を問われたり、「早く復元するといいですね」等の声をかけられました。

自然再生は時間のかかる事業ですが、高山植物が本来あるべき姿に少しでも戻せる様に、今後も取り組んでいきたいと考えています。



植生マット敷設の状況



敷設した植生マット

16～17世紀の伐採以前の林相の復元を目指して

木曾地方の森林は、古くから良質の木材産地として歴史的・文化的に貴重な社寺仏閣等の建築用材や維持に大きな役割を果たしてきました。

現在、上松町の赤沢自然休養林内（小川入国有林）に残されている木曾ヒノキ等の天然木は、16～17世紀（豊臣・徳川の時代）に伐採された後に成林した樹齢300～350年と推測されています。

では、この時代に伐採された元の森林はどのような樹種構成だったのか、どのようなサイズ構成だったのか、さらにどのような林齢構成だったのか等、かつての林相を復元すべく、残存する伐根等の遺物を探索し、その解析を（国研）森林研究・整備機構・森林総合研究所と共同で取り組んでいます。

平成30年に林内を探索したところ、根上がり木の空洞内で伐根の遺物が発見され、その残存状態は腐朽がかなり進んでいるものの、中心部付近にサンプルとして採取できる部分が残っていたことから、森林総合研究所で解析したところ、年輪数は428年分、酸素同位体解析で西暦678年から1106年と推定されました。



根上がり木の空洞内の伐根の遺物



サンプル採取した伐根の断面

この個体が伐採されたのが16世紀ごろと仮定すると、樹齢は1000年程度と推定されます。

この個体のほかに10数カ所の伐根と多数の根張り等を確認していますが、まだ一部の区域しか探索していないことから今後も継続し、伐根等の位置の確定と良質なサンプルの採取等につなげたいと考えています。

そして、かつての林相を復元できることを目標としています。

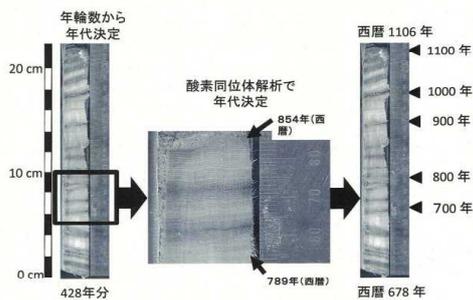


図1. 古い伐根から採取したサンプルから個体の生育した年代を推定

サンプルの年代を推定



伐採当時の伐根と推測される根張り